

阿羅漢の智慧と仏陀の智慧

——初期仏典から大乘仏典へ——

馬 場 紀 寿

初期仏教から大乘仏教への展開を考える上で部派仏教は両者を繋ぐ要の位置にあるにもかかわらず、従来の部派研究は個々の部派に焦点を当てた研究が中心であって、諸部派を横断して起こった変化を考察する試みは十分になされてこなかった。本稿は、このような問題意識に立って、初期仏典¹⁾や部派文献²⁾における解脱（成阿羅漢・成仏）に関する伝承を幅広く検討し、その変容過程を明らかにする。さらに、伝承の変容が起こった時代と場所を特定した上で、その大乘仏典への影響を考察したい。

1. 四諦の認識と縁起の認識

初期仏典において、解脱に達する伝承はいくつかの類型にまとめることができる³⁾。第一に、四禅を経て三種の明知 (vidyā/ vijjā) を得る〈四禅三明説〉では、比丘や菩薩が最終的に「苦・集・滅・道」「漏・集・滅・道」を認識して解脱する⁴⁾。第二に、四禅を経て六種の神通 (abhijñā/ abhiññā) を得る〈四禅六通説〉では、比丘が最終的に「苦・集・滅・道」「漏・集・滅・道」を認識して解脱する⁵⁾。第三に、〈縁起成仏説〉では、菩薩が十支（ないし十二支）縁起を認識して仏陀と成る⁶⁾。

解脱に関する伝承は他にもあるが、後代への影響が大きかった伝承は以上の三種であり、その認識内容は第一と第二の〈四諦〉と第三の〈縁起〉に大別される。この三種の伝承類型を踏まえた上で、二世紀以後、諸部派が並存した時期に作成された文献において、これらの伝承がどのように継承・改変されたかを検討しよう。

【アシュヴァゴーシャ】

二世紀頃に活躍したアシュヴァゴーシャ (Aśvaghoṣa) は、*Saundarananda* で修行者が阿羅漢と成る過程を論じ、*Buddhacarita* で菩薩が仏陀と成る過程を論じて

いる。 *Saundarananda* では、修行者が四禪と五神通を得た後、漏尽に意を向けて、「四聖諦を知によって認識し、また正しく洞察して⁷⁾」解脱する。一方、 *Buddhacarita* では、菩薩（ゴータマ）は、四禪を経て、初夜に第一の明知を、中夜に第二の明知を獲得するのだが、後夜には『城邑経』で説かれる縁起説を認識して仏陀と成る⁸⁾。 *Saundarananda* が四禪六通説を踏まえているため、四諦が認識対象なのに対し、 *Buddhacarita* は四禪三明説に縁起成仏説を組み込んでいるため、認識対象は縁起となっている。

【スリランカの上座部文献】

四世紀頃に成立したスリランカの上座部文献として、漢訳が残る『解脱道論 (*Vimuttimagga*)』とスリランカの史書、 *Dipavamsa* が挙げられる。前者は修行者が阿羅漢に成る過程を説き、後者はスリランカの歴史を仏陀の伝記から始める。『解脱道論』では、修行者は四禪を経て五神通を得た後、「〔四〕諦を洞察して阿羅漢と成る⁹⁾」。一方、 *Dipavamsa* では、菩薩が仏陀と成る際の認識について、過去の生涯に関する知と天眼を獲得し、「後夜に条件の様相（縁起）を還滅して、順と逆に専心した¹⁰⁾」直後に、仏陀と成る¹¹⁾。このように、『解脱道論』では四禪六通説を踏まえているため、四諦が認識対象なのに対し、 *Dipavamsa* では四禪三明説に縁起成仏説を組み込んだため、縁起が認識対象である。

以上のように初期仏典における諸伝承を組み合わせた結果、修行論を説く作品では、修行者が四諦の認識によって阿羅漢と成り、仏伝に関する作品では、菩薩が縁起の認識によって仏陀と成るという形式でまとめられたことが分かる。これと同様の傾向が、部派や地域を超えて、多くの論書や仏伝作品に確認できる。

まず、論書では四諦の観察が修行体系の中心を占める（馬場紀寿 2008 : 123-127）。説一切有部の『発智論』『大毘婆沙論』『雜阿毘曇心論』『俱舍論』、経量部系と考えられる『成実論』は四諦の観察を中心とした修行体系を説く¹²⁾。『有為無為決択』によれば、正量部も四諦の観察を中心とした修行体系を構築していた¹³⁾。

それに対し、仏伝作品では縁起の認識による成仏が説かれる（馬場紀寿 2008 : 45-49）。所属部派不明の『修行本起経¹⁴⁾』『過去現在因果経¹⁵⁾』『仏本行経¹⁶⁾』『仏本行集経¹⁷⁾』や *Lalitavistara*¹⁸⁾ といった仏伝作品は、三明説に縁起成仏説を組み合わせた様式でブツダの悟りを説く¹⁹⁾。上座部大寺派の *Jātakatthakathā* は仏伝をまとめた *Nidānakathā* で菩薩が縁起を認識して成仏したとする三明説を説き²⁰⁾、

(192)

阿羅漢の智慧と仏陀の智慧（馬 場）

大衆部の *Mahāvastu* は新層部分²¹⁾ で縁起を認識して成仏したという伝承を組み込んでいる²²⁾。

2. 時代と場所

文献の作者や成立年代から類推して、修行論を説く作品で修行者が阿羅漢と成る際の認識対象を〈四諦〉とし、仏伝作品で菩薩が仏陀と成る際の認識対象を〈縁起〉とする傾向が部派を横断して一般化した時代と場所は、おおよそ次のように設定できる。

アシュヴァゴーシャの生存年代と活動地域から、遅くとも二世紀に、少なくとも北インドで、この傾向が存在していたことになる。また、*Dīpavaṃsa* と『解脱道論』は、おそらく四世紀、遅くとも五世紀初頭に作成されたから、スリランカにこの傾向が及んだのは、五世紀初頭が下限年代である。

さらに、七世紀後半にインドに滞在した義浄が著した『南海寄帰内法伝』は、修行内容について、諸部派は大乗小乗の区別なく「共に四諦を修習している²³⁾」と述べる一方、*Buddhacarita* を「五天・南海で諷誦しないことはなかった²⁴⁾」と説く。*Buddhacarita* は縁起の認識による成仏を説くから、義浄から見る限り、七世紀後半においても、四諦が修行者の修習対象を、縁起が仏陀の認識内容を代表していたことがうかがわれる。

3. 大乘仏典の三乗説

『法華経』などの大乘仏典²⁵⁾ は、三乗に言及する際、四聖諦の認識を声聞乗に²⁶⁾、縁起の認識を独覚乗に²⁷⁾ 割り当てた後、その上に六波羅蜜を實踐する菩薩乗（または大乘）を位置づける。この三乗説の特徴は、声聞、独覚、菩薩が同じ修行内容に基づくのではなく、「四諦」「縁起」「波羅蜜」というそれぞれ別個の教説を修行するという点にある。

すでに指摘されている通り²⁸⁾、三乗説そのものは部派文献にも見出されるものであって、大乘に特有ではない。しかし、上記のように、声聞に四諦を、独覚に縁起を割り当てる三乗説は、大乘仏典以外に存在しない。この点で大乘仏典の三乗説は大乘独自の形式を具えているのだが、この問題を扱った先行研究は存在しない²⁹⁾。

しかし、ここで、本稿の調査結果を踏まえるなら、部派文献における二種の認識と大乘仏典の三乗説の間には明確な対応関係が見て取れる。そして、前者を踏

まえて後者が作成されたと想定するならば、『法華経』等の大乘仏典は、修行論を説く作品で示される〈修行者が四諦を認識して阿羅漢と成る過程〉を「声聞乗」として捉え、仏伝作品で示される〈菩薩が縁起を認識して仏陀と成る過程〉を「独覚乗」として捉えたことになるだろう³⁰⁾。

このような解釈は大乘を認めない者にとっては不当なものだったに違いないが、それが複数の大乘仏典に広まったことには相応の理由がある。声聞 (śrāvaka) は弟子を意味するから、阿羅漢を目指して四諦を修習する仏弟子を声聞乗に配したことは不自然ではなかつただろう。また、Norman [1991: 240-241] が指摘するように Gāndhārī Prakrit で独 (pratyeka) と縁 (pratyaya) がともに *prace'a* となることを考えれば³¹⁾、縁起を悟る仏陀を独覚 = 縁覚 (縁起を悟った者) と呼んだのも納得がいく³²⁾。さらに、辛嶋 [1993: 139-150] が明らかにしたように『法華経』の梵本諸本間、漢梵諸本間で智慧 (jñāna) と乗 (yāna) に互換性があることを踏まえれば、阿羅漢の智慧と仏陀の智慧を三乗説に組み込んだことも説得力があったと思われる。

この様式の三乗説は、すでに竺法護訳の経典 (『大宝積経』「密迹金剛力士会」) に確認できるから、成立の下限年代は三世紀である。その後、この三乗説は少なからぬ大乘仏典に採用され、東アジアでは特に羅什訳『法華経³³⁾』や『大智度論³⁴⁾』を通して、声聞と独覚の意味を決定づけることとなったのである。

4. 結論

- ① 初期仏典において解説 (成阿羅漢・成仏) に関する伝承は四禪三明説など複数存在していたが、それら諸伝承は部派文献において②のようにまとめられた。
- ② 修行論を説く作品で修行者が四諦を認識して阿羅漢に成る過程が説かれ、仏伝作品で菩薩が縁起を認識して仏陀と成る過程が説かれる傾向は、諸部派の成立後、遅くとも二世紀に、少なくとも北インドで存在し、遅くとも五世紀初頭にはスリランカに及んだ。この傾向は、部派を越えてインド各地へ広まり、おそらく七世紀までインドで継続していたと考えられる³⁵⁾。
- ③ 『法華経』等の大乘仏典は、三乗説において、四諦を声聞の認識 (声聞乗) として捉え、縁起を独覚の認識 (独覚乗) として捉えた。この種の三乗説は、三世紀にはじめて確認できるため、大乘仏典は三乗説の中に②の傾向を批判的に組み込んだと考えられる。部派文献と大乘仏典の対応関係は次表のようにまとめられる³⁶⁾。

(194)

阿羅漢の智慧と仏陀の智慧 (馬場)

【部派文献と大乘仏典における二種の認識】

	四諦の認識	縁起の認識
部派文献	修行者 ⇒ 阿羅漢 (修行論)	菩薩 ⇒ 仏陀 (仏伝)
大乘仏典	声聞の智慧 (声聞乗)	独覚 = 縁覚の智慧 (独覚乗)

1) 初期仏典の定義については、馬場 [2010: 68-87] 参照。 2) 本稿で、部派文献とは部派成立後に作成された非大乘文献を指す。 3) 成仏伝承に関する先行研究は、馬場 [2008: 72, note 4] 参照。 4) 四禪三明説は、上座部の『中部』『増支部』、有部の『中阿含』、法蔵部の『四分律』等に説かれる。資料の詳細は、森 [1995: 211-214]、馬場 [2008: 72, note 5] 参照。 5) 四禪六通説は、上座部の『長部』戒蘊品、法蔵部の『長阿含』戒蘊品、有部の『長阿含』戒蘊品等に説かれる。四禪六通説が四禪三明説から発展したものであることについては、榎本 [1982] 参照。 6) 縁起観察による成仏は、上座部の『相應部』『城邑経』や『長部』『大本経』、有部の『雜阿含』『城邑経』や『長阿含』『大本経』、法蔵部の『長阿含』『大本経』に説かれる。その資料と思想的意義に関しては、梶山 [1984] 参照。 7) *āryasatyāny avabudhya buddhyā catvāri samyak pratividhya caiva* (Sau Chap. 16, v. 5ab). 8) 梶山 [1983] 参照。 9) 分別諦 ... 作証阿羅漢果 (T32, 458a27-b1). 10) *tato pacchimayāmamhi paccayākāram vivatṭayi/ anulomaṃ paṭilomaṃ ca manasākā sirighaṇo//* (Dpv Chap.1, v. 11). 11) 上座部大寺派の教学を大成したブッダゴーサは、『解脱道論』や *Dipavaṃsa* を用いつつも、新たな視点で自らの作品を編纂した。馬場 [2008] 参照。 12) 『発智論』における二遍知の定義 (T26, 924b28-c3) によると、知遍知は、「智・見・明・覚」と「現観」から成る四諦の認識であり、断遍知は四諦の認識に基づく欲望の抑止である。Cf. Cox [1992]. 13) 馬場 [2008: 126] 参照。 14) T3, 471b-472a. 『修行本起経』は簡略な縁起の認識による成仏を説くが、『大毘婆沙論』(T28, 385a15-18) も類似した伝承を引用する。おそらく『修行本起経』のような仏伝作品から引用したのであろう。 15) T3, 641b-642b. 16) T4, 78b-78c. 17) T3, 793a-795c. 18) LV 343-350. 19) 『城邑経』には縁起説の後に四十四智事説が説かれ、十二支から無明を除いた十一縁起支とその集・滅・道が観察される。この部分は *Buddhacarita* 等、多くの仏伝作品に引用されないが、『仏本行集経』と *Lalitavistara* では縁起観察の後に四十四智事説にはほぼ対応する箇所が続く。これも三明説に『城邑経』の縁起説を組み込んだ結果である。四十四智事説については、仲宗根 [2008] 参照。 20) JAI 75. 馬場 [2008: 27-37] 参照。 21) 馬場 [2008: 45-49] 参照。 22) 『解脱道論』や『根本説一切有部律』等は四諦の認識による成仏を説くから、仏伝作品以外の部派文献では縁起型三明説は必ずしも受容されていなかった。馬場 [2008: 39-41, 60-61] 参照。 23) 四部之中、大乘小乗区分不定 ... 通修四諦。 (T54, 206c9-12). 24) 尊者馬鳴 ... 作《佛本行詩》... 五天南海、無不諷誦。 (T54, 228a11-14). 25) 『大宝積経』『密迹金剛力士会』(T11, 67c3-6), 『大宝積経』『善臂菩薩会』(T11: 535c17-536a8), 『大集経』『虚空蔵品』(T13,

110a1-4), 『現觀莊嚴論光明』(AAA 165.18-20) は, 声聞による四諦の修習と独覚による縁起の認識に言及する. 26) *caturāryasatyānubodhāya...śrāvakayānam* (SP 80.6-7). 27) *hetupratyayānubodhāya...pratyekabuddhayānam* (SP 80.9-10). 28) 斎藤 [1989: 71, note 27] に挙げられる諸論文参照. ただし, 平川 [1989:373] が指摘したように, 『大毘婆沙論』に三乗の語が出るのは新訳のみで, 旧訳になく, この語が『大毘婆沙論』の原典にあったかどうかは疑わしい. 29) 大乘仏典, ことに『法華経』の三乗と一乗に関する研究は, 斎藤 [1989: 69-74] に挙げられる諸論文や辛嶋 [1993] など枚挙に暇がない. 30) *pratyekabuddha* については, 仏教以前の苦行者と見なす桜部 [1956], 藤田 [1957], Kloppenborg [1974], 平岡 [2006], *pratyeka-* は *prātyaika-* から派生したと解釈する Hurvitz [1976], ジャイナ教と仏教の共通起源である苦行者文学における縁覚 (*pratyayabuddha*) に由来すると主張する Norman [1991] など, 多くの説がある. しかし, 当時の状況から大乘仏典の三乗説を捉え直す場合, 独覚の起源を仏教以前に求める必要はないであろう. 31) 三乗および独覚=縁覚の語義に関して, 辛嶋静志先生から貴重なご教示を賜った. 記して謝意を表します. 32) 二世紀に漢訳されたと考えられる『阿闍世王経』が声聞蔵・辟支仏蔵・菩薩蔵を論じる一節で十二縁起を悟った者を辟支仏と呼んでいるから (T15, 398a24-28), 遅くとも二世紀には, 独覚の認識を縁起とする解釈が存在したことが分かる. 33) 羅什訳『法華経』の序品 (T9, 3c18-26) と常不軽菩薩品 (T9, 50c2-7) は声聞に四諦, 独覚に縁起を割り当てているが, 竺法護訳, 梵本, 蔵訳の対応箇所では独覚に言及しないため, 伝承者あるいは羅什自身が改変した可能性がある. 34) T25, 295b9-24. 35) 初期仏典では四諦も縁起も成仏の際の認識対象として説かれていたにも関わらず, 二世紀以降, 仏伝作品で縁起の認識による成仏に伝承が一般化したのは, 仏伝作品と関係が深い仏塔において, 同じく二世紀以降, 縁起法頌が流布していったことと連動していたからだと考えられる. 馬場 [2008: 52-54] 参照. 36) 修行論と仏伝の背景に修行論に沿って実践する修行者 (*yogin*) の伝統と仏塔の周辺で仏伝を説き聞かせる読誦者 (*bhāṇaka*) の伝統があったとすれば, 本稿で取り上げた大乘仏典の伝承者 (菩薩) たちは両系統の上に自らの立場 (大乘) を築こうとしたことになる.

〈略号, 使用テキストおよび参考文献〉

AAA = *Abhisamayālamkāraḥ Prajñāpāramitāvyākhyā The Work of Haribhadra*, U. Wogihara (ed.), Tokyo, 1932, rep., Tokyo, 1973.

Dpv = *The Dīpavaṃsa, An Ancient Buddhist Historical Record*, H. Oldenberg (ed.), London, 1879, rep., New Delhi, 1982.

JA = *Jātaka with Commentary*, V. Fausböll (ed.), vol. I-VI, London: PTS, 1877-1896, rep. Oxford: PTS, 1877-1896.

LV = *Lalitavistara*, S. Lefmann (ed.), vol. I-II, Halle, 1902-1908.

Sau = *The Saundarananda of Āśvaghōṣa*, E. H. Johnston (ed.), London, 1928.

SP = *Saddharmapuṇḍarīka* (Bibliotheca Buddhica X), H. Kern and Bunyiu Nanjio (eds.), St. Petersburg, 1912.

(196) 阿羅漢の智慧と仏陀の智慧 (馬場)

T = 大正新修大蔵経.

- 榎本文雄 [1982] 「初期仏典における三明の展開」『仏教研究』 vol. 12, pp. 63-81.
- 梶山雄一 [1983] 「Aśvaghōṣa の伝える縁起説」『中川善教先生頌徳記念論集 仏教と文化』京都：同朋舎出版, pp. 201-219.
- 梶山雄一 [1984] 「輪廻と超越—『城邑経』の縁起説とその解釈」『哲学研究』 vol. 550, pp. 324-359.
- 辛嶋静志 [1993] 「『法華経』中の乗 (yāna) と智慧 (jñāna) —大乘仏教における yāna の概念の起源について」『法華経の受容と展開』京都：平楽寺書店, pp. 137-197.
- 斎藤明 [1989] 「一乗と三乗」『岩波講座東洋思想第 10 巻 インド仏教 3』東京：岩波書店, pp. 46-74.
- 桜部建 [1956] 「縁覚考」『大谷学報』 vol. 36-3, pp. 40-51.
- 仲宗根充修 [2008] 「*Samyutta-Nikāya* XII 65 Nagara に説かれる四十四智事説について—竹内義範説の再検討—」『印佛研』 vol. 56-2, pp. (206)-(211).
- 馬場紀寿 [2008] 『上座部仏教の思想形成—ブッダからブッダゴースアへ』東京：春秋社.
- 馬場紀寿 [2010] 「初期経典と実践」『新アジア仏教史 仏典からみた仏教世界』東京：佼成出版社, pp. 67-103.
- 平岡聡 [2006] 「独覚のアンビヴァレンス—有部系説話文献を中心として—」『仏教研究』 vol. 34, pp. 133-171.
- 平川彰 [1989] 『初期大乘と法華思想』東京：春秋社.
- 藤田宏達 [1957] 「三乗の成立について—辟支佛起源考—」『印佛研』 vol. 5-2, pp. 91-100.
- 森章司 [1995] 『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』東京：東京堂出版.
- Cox, C. [1992] "Attainment through Abandonment: The Sarvāstivādin Path of Removing Defilements," *Paths to Liberation: The Mārga and Its Transformation in Buddhist Thought*, R. E. Buswell and Jr. R. M. Gimello (eds.), Honolulu: University of Hawaii Press, pp. 63-105.
- Hurvitz, L. [1979] *Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma*, New York.
- Kloppenborg, R. [1974] *The Paccekabuddha: A Buddhist Ascetic*, Leiden.
- Norman, K. R. [1991] "The Pratyeka-buddha in Buddhism and Jainism," *Collected Papers volume II*, Oxford, pp. 233-249.

(※本稿は、平成 22 年度科学研究費補助金 (研究活動スタート支援) による成果である。)

〈キーワード〉 三明説, Aśvaghōṣa, 修行論, 仏伝, 法華経, 三乗
(東京大学東洋文化研究所准教授, 博士 (文学))